

# 研修医しぐさ



和歌山県医師会

〒640-8514 和歌山市小松原通1丁目1 県民文化会館

電話(073)424-5101代 FAX(073)436-0530

E-mail: ishikai@wakayama.med.or.jp

平成28年10月発行

## 研修医の皆様方へ

研修医の皆さんは、何を求めて現在の病院に来られたのでしょうか。多分、先輩医師から知識と技術を学ぶことを求めてのことではないでしょうか。

これは確かに最も基本的なところで、知識と技術は最低限必要です。しかし、もっと大事なことがあります。それは、自分の師匠と言えるような先輩を見つけることです。

医師として最も大切なことは、医療に対する謙虚さと熱意だと思います。

研修医の皆さんが自ら希望してきた病院には、自分が目標とする先輩、あるいは医師としての生き様を身を持って示してくれる先輩が必ずいるはずで、初期研修医時代にそのような先輩に巡り合うことは医師としての一生に亘るモチベーションの維持に繋がります。

私自身、昔は現在と研修制度は違っていました。心から尊敬できる先輩に出会って、その先輩の医師としての生き様から大切なものを学び、それを糧として現在まで臨床医を続けて来ました。私の医師としての生き方を決定づけた先輩であった訳です。

医師となって最初の2年間は、医師としての今後の生き方に影響するとても大切な時期です。皆さんが多忙な毎日の中で、良い先輩に出会えるように願ってやみません。



紀南病院 病院長  
赤木 秀治先生

## 平成28年度 県内新臨床研修医歓迎会

(主催：和歌山県医師会)



平成28年4月7日(木)  
於：ホテルアパローム紀の国

## ワークライフバランス講義

講義：「医学生のためのキャリア形成入門～自分のキャリアをデザインしよう～」

演者：秋田大学 医学部総合地域医療推進学講座 准教授 蓮沼 直子先生

日時：平成27年11月12日

和医大病院臨床講堂Iにて同大学医学部4年生を対象に実施



### (前号の続き)

●本日は用意したシナリオ(下記)を元に8つのグループワークにして考えてみましょう。各グループでディスカッション(どういう問題点、複数の選択肢)の後、レポート提出して下さい。時間の都合で数グループの代表者に発表してもらいます。

### (発表)

- 今日のワークは正解はないです。色々な意見、色々な解答があって当たり前です。いろいろな選択肢があるが、チャンスは一回かも知れない。チャンスは生かして欲しいと思います。ロールモデル、メンターはお手本や相談相手になるが、一人が絶対とは言えないのでいろいろな人の良いところ取りも良いでしょう。学生さんも自分の名刺を作り、いろいろな人との出会い、ネットワークへと繋げるのも良いと思う。
- 私はアメリカNIHの生化学ラボへ約3年間留学していたが、旅行とは違い留学して精神的にタフになった。アメリカでは「黙っている人は満足している」と思われることが多いので正しく話そうと思わず気にせずとにかくしゃべる、積極的に参加する方がよい。会話の上手、下手を気にする必要はない。
- 今日のワークで解ったと思いますが、一つの正解はないということ。「できる」の反対は「できない」でなく「しない」なのです。本日は時間的都合で配布のキャリア年表には触れませんでした。自分で書いてみて下さい。「書けない」という事に気づくことが重要です。計画表ではなく、自分のビジョンを考えてみて下さい。判らない人は卒業までに何をしたいのかを考えてみて下さい。多様性のある時代ですのでいろいろな解答があることを考えてみて下さい。

### 想定シナリオ

夫は部活の先輩で、卒業後和歌山で結婚しました。子供も生まれ実家がお互い遠いため、協力しながら子育てと仕事の両立を目指しています。

自分は外科系のある診療科にすすみ、後期研修も順調で、専門医を取得しました。さらに専門を深めるため、ある手術の技術を身に付け和歌山県立医科大学で活躍したいと思っていました。そのことを上司に相談したところ、海外のスペシャリストを紹介してくれて、半年くらい勉強しにいてもいいとってもらえました。

しかしまだ子供は3歳です。国外に長期間研修に行くことは想定していなかったのですが、若いうちに技術を身に付けたいとも思います。さて、どうしますか？

## ◆日本医師会女性医師バンク◆

バンクのコーディネーターは全員医師です。男性女性問わずバンクにご相談、求人、求職の成立はすべて無料です。電話番号は03-3942-6512です。お気軽にご相談下さい。

## 託児サービス

県医師会、都市医師会、所属部会主催の講演会(製薬会社共催も含む)では、託児サービスを設置できます。託児の場所代やシッター費用を実費補助いたします。和歌山県医師会迄、お問い合わせ下さい。

## 先輩医師の体験記

## 先輩研修医として

田辺市医師会 うえはら小児科  
上原俊宏先生



こちらは、長い旅路の途中にある小児科開業医である。まだまだ航海は続くであろうが、爰に少しばかり研修のログ(経過)を記しておくことにしよう。

旅の始め、つまり研修の開始は和歌山医大の小児科学教室に入局することから始まるはずであった。卒業する少し前の頃、爾後師匠筋に当たる当時の児玉貞資教授の小児科学の臨床講義を聴いていた学生時代の頃の話である。教授の講義で今でも鮮明に記憶に残っているのがslow virus infection(SVI)の項であり、当時はまだプリオン病が提唱されていない時代であった。麻しんの急性発症からかなり遅れて発症するSSPEに関して詳細な内容の講義があったのである。関連疾患として羊や山羊に診られるスクレイピー(Scrapie)や、アリューシャンミンク病(Aleutian disease of mink)の話があり、ついでクールー病(Kuru)の説明があり共にslow virus infectionではないかとの仮説を講義で述べられたのを今でも覚えている。またこの折に、パプアニューギニアの高地ではCannibalism(食人習慣)が人間の文化として存在することを学んだのであった。

最近では、上記の多くの疾患はSVIではなくてBSEやCJDあるいはプリオン病の範疇であることが知られている。時代もそれなりに変わってきたと言うことであろうか。当時、児玉先生は、整然と文献を渉猟され最新の仮説を学生の臨書講義で提示されたのであった。

その児玉教授の講義に魅せられて小児科入局を決め、結果的に小児科医になるという経緯が決まったのだからその頃から、小児科医としての研修が始まっていたといえよう。しかしながら希望通りに直ぐに和医大小児科に入局できたわけではない。

当時、同じように入局志願をした医学生が同級の中に五人ほどいたのである。それまで、小児科医局入局者は毎年数人程度であったので、五人となると担当する指導医の数が少なく十分な教育・研修が可能でない。つまり同年で五人の入局は出来ないとのことであった。結局小生が1年間を大学外の施設で研修し、1年遅れで入局することとなったのである。

その1年間を横須賀のUSNHで研修をした。当時はベトナム戦争(1955～1975年4月)が終焉にさしかかる頃であったが過度の重傷者は本国送りとなっており、野戦病院的な環境ではなかったが米国の軍人・軍属とその家族の多くがUSNHを受診していた。その1年間の米語文化圏内での研修ではジョークやスラングが分からず、施設内で字幕のない英語映画をみても時に観客が大笑いするのに、ついていけないことがママあった。研修に関して言えば、その地で

は英語の研修はほとんど出来なかったといえよう。

これを魁として、その後は派遣医局員として主に県内の各地の公立病院で小児科医としての研修時間を重ねてきた。最終的には田辺市湊の紀南総合病院(現在は紀南病院)での研修を終え、平成の初め頃、田辺市朝日ヶ丘山の手に「白い小児科診療所：イメージカラーは明るい空色」を開設したのであった。もう四半世紀も前のことである。

でも、実際の研修は開業してから始まったといえよう。当時の和歌山医大では生理検査の一環として脳波検査が行われていた。小児科レベルでの範疇を述べれば医大の中央検査室で年間約1,000名、覚醒で脳波のとれない乳幼児などは小児科の医師が脳波検査を担当していた。特記すべきは当時の小児科学教室は5-2病棟に脳波専用のシールドルームを持っていたのである。これが年間1,000名ほど。つまり年間2,000程の小児の脳波所見を纏めるのが当時与えられた仕事であり、その頃はホパテを臨床使用していたので教授診及びてんかん外来に於いて必要となる脳波の所見を報告するという業務をしていたのであった。その余波で、紀南病院勤務中も脳波の所見報告という仕事をしていた。ところが小生の退職後、紀南病院での脳波読みがいなくなることから、開業の後も紀南病院での脳波所見検討会に参加するようになった。いや、それは当時の教授であった小池通夫先生にやんわりと指示されたことであつたのだ。

多くの検査業務に於いて、生理検査や血液検査の項目や内容は日進月歩で進捗しているが、脳波検査においては、機種がデジタル化されているが、脳波の所見読みは20年前と極端には変わっていないようだ。てんかんの治療薬も新しい薬が多く使用されている。さらには「てんかん症候群」の理解もかなり進んできているに関わらずにである。

それでも未だ週に1回ほどであるが、脳波の検討会という研修会に定期的に参加している。この会には、小児科のてんかん外来担当医の参加は勿論、紀南病院を研修している若い研修医達も参加している。脳波を必要とする診療科はいろいろある、神経内科、脳外科、精神科等も脳波の検査オーダーをするかも知れないが、圧倒的に多いのが小児科であろう。脳の異常発射の検出を始め、脳波による中枢の発達状態の推定が出来ることも小児科が脳波検査をルーチンのごとく行う理由の一つである。たかが脳波、されど脳波とされる所以であろう。小児科医になる者を含め、医療人としての旅路を迎える者に：Bon voyage!

## 第48回和歌山県医師会医学会総会

平成28年11月20日(日) ホテルアバローム紀の国2階  
(午前:一般演題、シンポジウムは13:30～16:30)

### シンポジウム テーマ「脳梗塞～超急性期治療から在宅医療まで～」

講演Ⅰ～超急性期治療～「虚血性脳血管障害に対する最新の脳神経血管内治療」 昭和大学藤が丘病院 脳神経外科教授 寺田友昭

講演Ⅱ～回復期リハビリテーション～「地域における回復期リハビリテーションの役割一質の高いくらしに向けて」  
小倉リハビリテーション病院院長 梅津祐一

講演Ⅲ～在宅医療～「地域に貢献するリハビリテーション医療ー脳卒中患者が元気に暮らすためにー」  
横浜市立大学医学部リハビリテーション科学教室教授 中村 健

## 医師会研修医会費無料化について

和歌山市医師会・和歌山県医師会・日本医師会、すべて研修医期間2年間は会費無料です。

### 【入会手順・お問い合わせ】

和歌山市医師会事務局(073-435-5199)に「和歌山市医師会研修医会員について知りたい」とお伝え下さい。

和歌山市医師会 URL : <http://washii-unet.jp>

## 講演会のお知らせ

平成28年11月22日(火) 19:00～20:15  
ホテルアバローム紀の国

### 女性医療研究会

Wakayama JOY JOY Meeting

「アレルギー疾患とプロバイオティクス」

講師：鳥取大学医学部客員教授 榎本雅夫

(文責：和歌山県医師会 榎本多津子・木下智弘)